本学主催事業報告

メキシコの文化的伝統「死者の日」をめぐる知の発信

小林貴徳

2022年度千代田学関連事業

2022年度に採択された千代田学事業「千代田区の文化的多様性における国際性に関する調査・研究」（研究代表者:根岸徹郎）では、異文化に対する理解を深めるとともに、地域社会への知の発信に取り組んでいる。その一環として、2022年10月末から11月初頭に実施したのが「死者の日」をテーマとした公開講演会と死者に捧げる祭壇の展示だった。

「死者の日」とは、2008年にユネスコの無形文化遺産リストに「死者に捧げる先住民族の祭礼（Indigenous Festivity Devoted to the Dead）」として登録されたメキシコの文化的伝統を指す。毎年10月31日の深夜から11月2日にかけて現世に回帰する死者を迎えるため、墓地を美しく飾り立て、家庭内に祭壇をこしらえるという、日本のお盆に似た伝統行事である。「死者の日」を題材として、その文化的歴史的背景について学びを深め共有すること、また、その成果を学内外に発信することが本企画のねらいである。

「死者を弔う、死者と過ごす―メキシコの文化的伝統『死者の日』―」と題する講演会が、10月29日（土）に神田キャンパス10号館3階10031教室（黒門ホール）で開催された。在日メキシコ大使館との共催で実現した講演会は、根岸徹郎氏（本学国際コミュニケーション学部学部長）の挨拶とメルバ・プリーア閣下（Su excelencia Embajadora Melba Pría、駐日メキシコ大使）によるビデオメッセージの上映によって幕があげられた。

招待講師アルフォンソ・ガルドゥーニョ（Alfonso Garduño）氏による講演「死者の日の儀式的および象徴的供物（Ofrenda Ritual y Simbólica del Día de Muertos）」（スペイン語、逐語通訳あり）では、祭壇を構成する供物の象徴性について、同氏の専門である実験考古学の見地より分かりやすく説かれた。ガルドゥーニョ氏に続く2本の講演は本学部教員の井上幸孝氏による「死者の日の歴史的背景―メキシコ、文化的混淆の500年」と筆者（小林）による「故人の回帰を待ちわびて―現代メキシコにおける先住民族の死者の日」だった（いずれも日本語）。井上氏の講演では、16世紀の「文化の出会い」に端を発する宗教的混淆という観点から「死者の日」をはじめとするメキシコの祭礼の来歴が明快に解説された。先住民コミュニティでの民族誌データを盛り込んだ小林の講演では、「死者の日」を年間サイクルに再配置し、日常の営みという文脈からこの文化的伝統の役割を検討した。

講演に続いて本学部教員2名によるコメントが加えられた。中国の宗教学を専門とする鈴木健郎氏と、米国の文学を専門とする宮本文氏によるコメントでは、「死者の日」の伝統がメキシコのみに閉ざされるものではなく、異なる、あるいは隣接する地域間で差異や共通性を見い出し考察することの醍醐味が示され、フロアからの活発な質疑を引き出した[1]。本講演会では、本学の学生や教職員をはじめ、学生の保護者や卒業生、近隣大学の教員や学生を含む多くの一般市民など、およそ70名の参加がみられ盛況のうちに閉幕した[2]。

写真1　メルバ・プリーア大使のビデオメッセージ

写真2　ガルドゥーニョ氏の講演(提供:広報課)

よって停滞していた学生間に交友ネットワークを構築する機会ともなった。

半月におよぶ準備作業[3]を経て、講演会前日には10号館3階に祭壇が設置された。多様な供物や無数のマリーゴールドの造花で飾られた展示は、実際にメキシコの家庭に用意される祭壇と比べても遜色ない仕上がりとなり、祭壇中央部にはメキシコ史の4名の偉人[4]の写真を「遺影」として据えた。くわえて、祭壇脇の壁面にはこの伝統行事の来歴や文化的背景についてわかりやすく解説するポスターを掲示し、異文化を学ぶ舞台が整った。3階での展示作業の傍らで1階ではエントランスの天井が色とりどりのパペル・ピカドで飾りつけられ、祭礼の雰囲気が華やかに演出された。10月28日に設置した祭壇展示は場所を移しつつ[5]、11月8日の撤去までのあいだ、日中はフロアを鮮やかに彩り、夜間はロウソクの灯りに照らし出された。授業と授業のあいだに忙しなく教室移動をする学生のみならず、靖国通りを行く会社員や親子連れなどもふと立ち止まり展示物を眺め、解説ポスター

他方、講演会の開催に向けて10月上旬から「死者の日」の祭壇展示の制作に着手した。「死者の日」を迎えるにあたりメキシコで家庭内に用意される祭壇をできるだけ忠実に再現する取り組みであり、この作業には本学部異文化コミュニケーション学科の1~3年生の延べ30名が携わることになった。後期開始前の9月半ばに実施したキックオフ・ミーティングでは、展示制作を効率的に進めるための作業分担とグループ分けを実施した。祭壇づくり、カラベラ(骸骨の張り子)、パペル・ピカド(切り絵)、解説パネルなどグループごとの作業は学年を超えた連携を生み、日ごろの学習や海外研修プログラムに関する情報交換など、covid19の感染拡大に

写真3　「死者の日」の祭壇展示に携わった学生有志(提供:広報課)

写真4 「死者の日」の祭壇展示(提供:広報課)

写真5 「死者の日」の解説パネル(提供:広報課)

をじっと見入る市民の姿は珍しくなかった。

公開講演会と祭壇展示で構成された本企画の趣意はおおむね達成されたと考えて良いだろう。というのも、公開講演会後に寄せられたアンケート❖6を参照すれば、「なじみの薄いメキシコの習慣について様々な視点から学ぶことができた」「故人を偲ぶ慣習についてメキシコや米国の移民社会、また中国の事例から考えることができ、改めて日本のお盆について考えさせられた」といった意見で占められていたためである。アンケートでは、祭壇展示や解説ポスターが講演内容を補足し、異文化に対する理解に効果を発揮したことも読み取れた。

その一方、祭壇づくりに携わった学生にとっては、「先輩(後輩)と交流することができて楽しかった」「授業外の学ぶ機会を楽しみながら取り組めた」といった意見のように、他学年との交流や共同作業を新鮮で刺激的な場と捉えていたようである。たしかに学部創設以来、covid19の感染拡大によって学内行事はおろか授業にいたるまでが厳しい制限のもとに置かれていた。とりわけ2020年度入学の一期生にとっては、さまざまな質問を寄せてくる後輩を前にして初めて自身が先輩となっていることを実感したのではないだろうか。実際のところ、「死者の日」の祭壇展示は2020年度から企画していたが、2020年度は第二波により、また2021年度は第五波の影響によって実現できずにいた。2年の延期を経たことにより、結果として千代田学の枠組みで、それも本学部の1期生から3期生まで学生の交流をも促すことができた。まさに怪我の功名といっていい。

学生同士をつなぎ、学びをつなぎ(授業と授業外)、大学と地域社会をつなぎ、官学民をつなぐという、さまざまなレベルでの対話や実践の場の創出が国際コミュニケーション学部には期待されている。2022年度はメキシコの文化的伝統をめぐる取り組みとなったが、今後も引き続き、世界のさまざまな言語や文化圏を対象として、積極的な発信を学内外に向けて継続していきたい。

❖1…本講演会は対面のみの開催として企画したが、遠隔地からハイブリッド開催の要望が数多く寄せられた。そのため、メキシコ大使のビデオメッセージのWEB公開にくわえ3本の講演についてもWEB上で配信する予定にしている。

❖2…講演会の開催に際して、本学広報課や千代田区役所コミュニティ総務課、千代田区観光協会、さらにはSENDAIカフェの方々に多大な宣伝協力をいただいた。この場を借りて感謝申し上げます。

❖3…展示物の準備作業の場としてグローバルフロア(10号館15階)の利用を快諾していただいた国際交流事務課の方々にはこの場を借りて御礼申し上げます。

❖4…植民地期の詩人である修道女ソル・フアナ・イネス(Sor Juana Inés)、先住民族出身の大統領ベニート・フアレス(Benito Juárez)、メキシコ革命の英雄エミリアーノ・サパタ(Emiliano Zapata)、画家フリーダ・カーロ(Frida Kahlo)の4名を選定した。

❖5…講演会終了後、より多くの市民の目に触れてもらえるように祭壇展示やポスター掲示を1階(靖国通り側のガラス脇)に移設した。本展示企画は教務課、学務課、庶務課、学生生活課の多くの方々のご理解とサポートがあってこそ実現するに至った。深く感謝いたします。

❖6…開始時に配布したアンケート票を退場時に回収する方法で実施した。回収率は参加者のほぼ50%にあたる38件(本学学生6名、教職員7件、学生の保護者/卒業生4名、一般市民21件)だった。